

平成23年2月15日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会

左の写真に見覚えがありますか。今から百年余前の土浦中学校合格通知書（はがき）です。間もなく卒業を迎える3年生諸君が本校入学直前の合格者説明会に出席された際、配られた『Acanthus』新入生歓迎号に掲載されたものです。本校に関わる古い資料に触れることで、新入生であった皆さんは本校入学の意味合いを感じ取られたことでしょう。

## 『アカンサス』の発行始まる

進修同窓会では、在校生にもっと本校の長い歴史を知って欲しいとの思いから、土中時代から戦後の学制改革をへて今日の土浦一高に至るまでの数々の事跡を掘り起こして紹介しようとして、この小紙の発行を試みました。それが、今から3年前の平成20年3月、現3年生の新入生歓迎号として創刊され、毎月（夏休みの8月は休刊）発行を続けてきた『アカンサス』です。つまり、『アカンサス』は現3年生と共に歩んできたことになりました。その皆さんも卒業というこの機会に、これまでの『アカンサス』三十数号から主だった事柄を断片的ですが抜粋してみました。

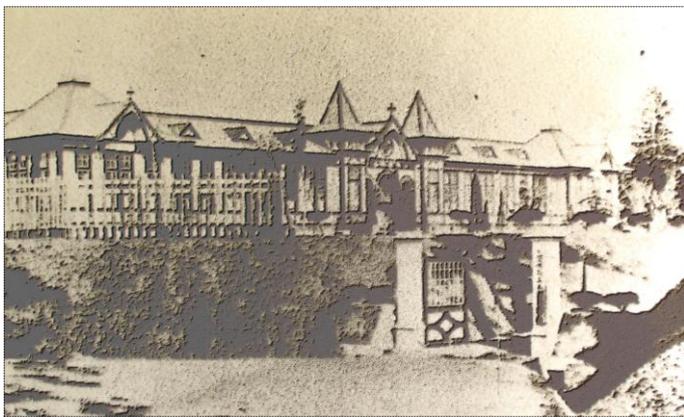
学校の創立は111年前の明治30年、茨城県立尋常中学校土浦分校として産声をあげました。大変歴史の古い学校なのです。このような全国有数の伝統校の一員になられた皆さんを心から歓迎いたします。

「今回選抜試験合格二付当校第壹年級二入学ヲ許可ス」と記された上の資料は、明治36年4月13日付けの本校合格を通知した郵便はがきです。この土浦中学校合格通知書を手にした菊田禎一郎さん（中7回生）も皆さんと同じ思いで、幾度となく読み返したことと思います。明治30（1897）年以来、同じ感慨に身を委ね、未来に大きな夢を羽ばたかせた少年が毎年春には生まれました。そして今、君たち327名は同じように夢と希望を抱く百十二回目の少年となったのです。合格を心からお祝いすると共にこれから一高での限りない可能性への挑戦を期待します。

【新入生歓迎号（平成20年3月）】

## 旧本館とアカンサス

旧本館には、数多くのしかも様々な装飾が施されています。その中でもこの建物のシンボリック的存在と言っても過言でない装飾があります。それが「アカンサス」という植物の花と葉をモチーフにしたデザインです。



土浦中学校真鍋新校舎

『進修』第6号（明治38年4月）より

右の竣工間もない真鍋台新校舎の写真を見て下さい。正面玄関屋根及び左右両翼の切妻破風の頂点に十字架の様な飾りが見えますね。これこそ、かつて、四弁の花が雄大に咲き誇っている「アカンサス」そのものなのです。

残念なことには、今は三つともありません。代わりに正面玄関上には貧弱？な四角錐の飾りがあるだけで、左右の破風には面影すらありません。しかし、「アカンサス」が全く消えてしまったわけではありません。正面玄関の三連アーチの柱頭部に「花」を、東西の通用口の軒の屋根には「葉」を象った装飾が現存しています。

【第4号（平成20年7月）】

## 重文の旧本館

それにしても県の文化財保護審議会委員でもあった一色史彦氏の業績は大きい。

それは、彼が昭和49年8月、土浦一高本館の正面玄関屋根裏の小屋束に釘打ちされた一枚の棟札を発見し、設計者駒杆勤治の存在を明らかにしたこと、同年9月に龍ヶ崎一高に保管されていた設計図を調査することで、これら建築物の文化的価値を確認した。その結果、土浦一高旧本館と太田一高旧講堂は、旧制中学校校舎としては全国で初めて国の重文指定を受けたのである。因みに本校旧本館の棟札には、

表「上棟式 大棟梁茨城県技師工学士駒杆勤治」

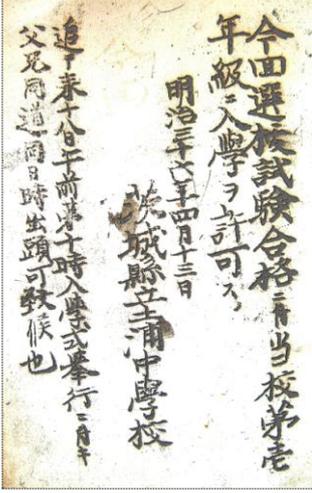
裏「明治卅七年七月五日 請負人石井権蔵」

とあり、発見者の一色氏は「明治の茨城に開花した駒杆勤治」（『常総の歴史』第22号）で、一般に建造物の文化財指定で棟札という資料は重要なものであり、とくに旧本館の棟札は建築史の世界では第一級の資料であるとして、昭和51年2月3日、本館と共に文化財に指定されたのだと述べている。

「思い出がいっぱい詰まった旧講堂は、今なお威風堂々と母校の北側に残っている。百年を超える太田中、太田一高の歴史をじっと見続けてきたに違いない。」「益習の百年」（太田一高百年史）と記しており、母校のモニユメントとしてその役割を果たし続けている。「

「国の重文に指定された太田一高の旧講堂と同じ設計で同じ時期に竣工した旧水海道中の講堂は、昭和48年に老朽化のため取り壊された。講堂内部の部材の一部や玄関車寄せの柱頭飾りなどが保存されているものの、この時点で旧制水海道中時代を物語る建物類は全て姿を消したのである。」

『済美百年』（水海道一高百年史）には、「こ



のセミナーハウスの基本設計図が同窓会役員会で初めて公開された時、思い出深い旧講堂の外観を模した設計は大好評で、出席者の間からは「口々に『ああ懐かしい。昔の講堂によく似ている。これはいい』との声が上がった。」と記されている。それだけに、平成12年に、外観を旧講堂に模したセミナーハウス（亀陵会館）の完成は同校卒業生たちにとって往時を偲ぶ拠り所となった。」

【第8号（平成20年12月）】

### 《宝の持ち腐れ》にしないために

全国には、文化財の指定こそ受けていないが草創期の校舎を有する高校は数多くある。移築改装して記念館・資料館・現役教場として保存・活用している例が多い。

重文指定の校舎では、通年一般に公開されている「厳浄閣」（旧富山県立農学校本館）や郡山市の郷土博物館として開館している安積高校旧本館は、既に大がかりな解体修復を済ませ、文化財としての在るべき姿を確立しているといえよう。

本校旧本館は、限定的な公開に止まり、活用面でもまだまだの感があり、建物の保存・活用になお一層の創意工夫が必要である。

旧土浦中学校本館は、他の重文校舎と比べても決して見劣りするものではない。掛け値なしに第一級の文化財校舎である。しかし、専門家の調査で、眼に見えない建物内部にかなりの老朽化が確認されている。このままの状態が続けば近い将来、間違いなく朽ち果ててしまう。何としても全面的な解体還元修理による保存こそ緊急の課題である。その実現には、同窓生、地域の人々や県や国の理解と支援が必要である。

【第9号（平成21年1月）】

### 自前の土浦中学校歌

明治期に創立した旧制中学校では、校章は創立時に制定されているが、校訓や校旗、校歌は創立後相当の年月が経ってから制定された学校が多いようだ。

『済美百年』（水海道一高百年史）に校歌制定について「いずれの中学校も校歌誕生までに一〇年以上の歳月がある。これだけの年月を経ればその学校の教育目標や方針も確立（校訓や校是の制定）し「校風」も生まれるから、それを校歌に詠って学校への所属感や一体感をいっそう強めようという機運が生じたのであろう」と記している。

当時、校歌を作成するには作曲という困難な壁があった。したがって多くの学校では校歌つくりを専門家に依頼している場合が多い。こうした中で下妻中の校歌は異色ものといえよう。当時五年生二人の合作で横瀬夜雨が筆を加えた詩を、旧制一高の寮歌「嗚呼玉林に花つけて」の曲にのせて、生徒たちの間で自然に歌われ続けていくうちに校歌として認知されていった（『為校百年史』）といふ。そういえば、竜ヶ崎中の校歌も同様に、曲は旧制一高寮歌「アムール川」のものを借用している。

その点からすれば、土浦中の校歌はその作成過程からみて健気なものである。歌詞は生徒の公募によるもので、入選した四年生堀越晋の詞を本校教諭尾崎楠馬が補筆し、作曲した。国漢科主任でありながら、音楽にも堪能な尾崎青年教師の存在が、自前の校歌誕生を可能にしたのである。

### 歌われなかった三番

本校校歌は、一番で、筑波や霞浦の雄大な自然を、一番では、郷土の美しい季節の移ろ

いを、三番で、この素晴らしい風土に培われる若人の心意気を、そして最後の四番で、この学び舎での青春を誇らかに歌い上げている。

制定以来歌い継がれてきたこの校歌は戦後しばらくの間、三番が姿を消した。終戦後、戦前・戦中の軍国主義教育を排除し、民主化を進めるといふ政策のもと、全体主義的なものはタブーとされたのである。三番の「東国男児の気を享けて 我に武勇の気魄あり」というフレーズがこれに抵触するということから三番が歌われなかったのである。

それにしても、本校校歌の三番は全歌詞の主題をなす部分である。これを欠いた校歌しか歌えなかった当時の生徒たちが、三番の存在を知ってどんな感慨をもったであろうか。

ともあれ、本校の校歌は生徒によつて生み出されたものであるだけに、説教がましくなく、曲も簡潔で歌いやすい。それでいて伝統校としての風格を感じさせる校歌である。

【第13号（平成21年5月）】

### 百年歌い継がれてきた校歌

本校の校歌は明治44年に制定されましたので、来年百年目を迎えます。字句等一部改変はあったものの殆ど元のまま現在に継承されています。【新入生歓迎号（平成22年3月）】

一高祭や野球応援など事あるごとに、校歌《電城一千の健男児》を、初めは少し躊躇いながらも、やがては拳を振り上げ屈託無く声高に謳う本校女生徒が、新たな《我が校風を輝かせ》ている頼もしい担い手に思える。

【第29号（平成22年11月）】

### 三万余の進修同窓会員

三万に及ぶ卒業生たちが築き上げてきた伝統と校風、百余年の風雪に耐えて響え立つ文化

財の旧本館、これらは何ものにも代えがたい本校の有形・無形の遺産である。君達はこの恩恵に浴しながら、今ここで学ぶことができる幸運を噛み締めると共に、この遺産の価値をさらに高めて、土浦一高の新たなビジョンを描いて欲しい。【第11号（平成21年3月）】

この春、本校生徒三十八名は米国への海外研修に出かけます。ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、スミソニアン博物館、マダケネディスペースセンターなど世界最先端の研究機関を訪れるものです。こうした普通では近づくこともできない研究所などで研修が可能になったのは、全米各地の大学や企業などで活躍している本校の卒業生たちが、土浦一高海外研修の企画を聞きつけて奔走してくれた結果なのです。同窓生の力強い支援に改めて土浦一高の伝統の力を感しました。進修同窓会は皆さんと共に在ります。

【新入生歓迎号（平成22年3月）】



今から考えると、この『アカンサス』も私どもの独りよがりな押し付けがましいものであったかも知れません。内容的にも皆さんの求めていたものとは必ずしも合致していなかったかと思えます。にも関わらず3年間お読みいただいたことを感謝すると共に、これから卒業した後も、本校ホームページを通して、折に触れ『アカンサス』とお付き合ひ願えればと希望しています。

創刊以来の『アカンサス』各号は本校のホームページ（進修同窓会）に掲載しています。